

私の瀬戸臨海実験所

内田 紘臣

(串本海中公園センター)

昆虫少年が初めて海と出会ったのは、父の故郷である広島市外五日市町（現広島市佐伯区）の海岸であった。小学生の時分から、夏休みには従兄弟がこぞって五日市の家に集まり、海に親しんだ。昆虫少年はいつの頃からか、海の生き物にも興味を持ち、貝殻や海藻を採集し、陸では見られない多様な生物の存在を海岸で知った。五日市の家から歩いて数分で海岸の防波堤に達し、その海岸は牡蠣ヒビに、また後年にはそれに加えて海苔ヒビとに占領されてはいたものの、干潮時には岩や堤防に付着する生き物や、多くのカキ殻片を含む砂底中の生き物を見つけて楽しむことに費やされた。しかも従兄弟たちや弟が楽しそうに泳いでいるのを横目に見ながら。実はこの昆虫少年はカナヅチだったのである。

このようにして、高校生にまで成長した昆虫少年はそれでも春～夏には虫を追っていたが、海辺へ行く機会には、貝類その他の海の生き物たちと付き合った。その頃までに付き合った海岸のほとんどは広島で、その他は居住地近郊の阪神間の海岸であった。すなわち大学2年生までの昆虫少年にとっての海は瀬戸内海に限られていたことになる。

よく知る五日市の海は、高校生の時には汚染のためすでに遊泳禁止になり、海水浴は宮島まで出かける事態になっていた。また、小学生の時には堤防に腰掛けて、自家製の竿で小型のチヌが沢山釣れたが、これもすっかり姿を消し、高校生の時には、早朝暗いうちにゴカイ掘りをして、夜明け直前に小船で沖へ出かけ、昼過ぎまで釣っても、釣果はベラ2-3匹といった惨憺たる状況が続いた。すなわち1960年頃には瀬戸内海はすでに汚染しつくされていて、かつ

ての生き物の健全な生活は失われていたのである。

歳だけは多少食った昆虫少年にとって昆虫図鑑は必需品である。とくに大阪からデビューした保育社が1954年に発行した原色図鑑シリーズ第1巻、原色日本蝶類図鑑は世間をあっと驚かせた出来栄であり、多くの少年を昆虫採集へ駆り立てた。手元にあるものは1960年発行で、定価850円とある。昆虫少年が最初に手に入れた保育社の図鑑である。保育社は蝶類図鑑に味を占めて、甲虫、その他の昆虫、貝類と矢継ぎ早に次々と図鑑を発行したのである。

そして保育社原色図鑑シリーズ第8巻として発行されたのが内海富士夫先生の海岸動物で、初版発行は1956年10月とある。蝶類図鑑から遅れることわずか2年である。しかも内海先生の巻頭言にもあるように、出版の計画はすでに蝶類図鑑出版の前からあったとのことである。この図鑑シリーズの他の巻を見れば分かるが、この巻だけは一種異様な対象物を扱った図鑑に見える。このような図鑑を企画し、内海先生の所に執筆依頼に行かれた保育社の大胆な企画に敬意を表したい。昆虫少年がこの図鑑を目にしたのは高校2年、すなわち1961年の4月である。無論初版であった。故あって高校では化学部に属した。隣に生物部があり、そこに生物部が図書室から長期貸し出しを受けていたくだんの図鑑があり、よく遊びに出かけていたその部室での邂逅であった。

この図鑑は昆虫少年に大変な驚きを与えた。現在なら原色写真を豊富に掲載したこのような図鑑は珍しくなく、またテレビでも自然をテーマにした番組の中で、あるがままの色彩と形状で海産無脊椎動物が紹介されることもあるが、終戦後の復興期に普

段目にする事のない、別の言い方をすれば、海のものとも山のものともよくわからない生き物の、生時の姿を色彩とともに示した書籍など、16才の少年にはまったく経験のないことであつたし、このような類書は内海先生もその巻頭で述べていられるように、わが国ではこれまでなかったものである。その上、彼がこれまで海岸で経験してきた数少ない無脊椎動物の仲間に比べて、はるかに異様な形状のものが多く、それにも増して、色彩華やかな動物であふれていたからである。この理由はやがて判明した。昆虫少年のこれまで経験した海は瀬戸内海に、また、基本的には潮間帯付近で、それも典型的な岩礁海岸ではなく、砂礫浜^{されき}や砂浜と小規模な岩礁とが交互に入れ替わる海岸に限られていたからである。

生物部に海産の無脊椎動物に興味を持つ部員のいないことをよいことに、少年はこの図鑑を隣の化学部の部室に長期借り出し、暇を見つけては眺めていた。また、海岸で集めた無脊椎動物標本の正体を知る必携の書籍となった。さらにこの図鑑に掲載されている鮮やかな色彩のものや、当時の少年にとって奇妙な姿をしたものと映った動物たちに出会いたいとの願望が募った。ある日、部室の棚に立てかけてあったこの図鑑が、側に置いてあった石炭酸の試薬ビンの転倒によって汚損した。本の地が一面phenol 浸しになり、強い刺激臭を放つようになったのである。生物部に相談した結果、この書籍は破損したということで廃棄処分しようということに決めた。そのようなわけで各ページの下部が汚損したこの初版本は、1961年発行の同書改訂版と共に、今もってわが家の本箱にならんでいる。初版本なので、ちよくちよく参考にするところがあるが、この図鑑を手取る度に昆虫少年がこの図鑑に出会ったときの驚きと感動がよみがえる。

関西学院理学部は少年が高校2年生の時に新設された。大学の一般教養の担当として数人の生物の先

生がおられた。その一人、小島吉雄先生はかつて(1946年?)真珠研究所の松井佳一先生と共に瀬戸臨海実験所におられたことがあり、その関係から、学部の学生有志数名を引き連れて、かなり昔から瀬戸で臨海実習を行っていたそうである。布施良子さんや左海昭三船長さんなどは瀬戸におられた時からの知己であつたとのことである。理学部新設に伴って、臨海実習が本格的に採り入れられたことはいうまでもない。学科としては物理学科と化学科しかなかったが、生物系には4名の教官がいらした。その4教官が大勢の学生と共に、こぞって瀬戸にお世話になった。専攻していた分野が細胞遺伝学と細菌学であつたため、これらの先生方は通常実験室に閉じこもりっぱなしの生活であつた。それで、半分は夏休みの遊山気分がなかったとはいえないように感じられた。

昆虫少年は新設の理学部化学科に入った。2年生の夏、すなわち1964年8月下旬、臨海実習のために初めて瀬戸を訪れた。その年の7月に小諸か軽井沢あたりで満二十歳になっていた昆虫青年は、かねてからくだんの図鑑で見ていた風変わりな動物たちに出会うことについては、あまり期待していなかった。それは昆虫採集から学んだ知恵である。著名産地と、出現最盛期とが記されている図鑑のデータを頼りに採集を試みるが、必ずしも対面できるとは限らなかったからである。それでもいくつかの動物には出会えるようには思っていた。

30数名の学生と数名の教官は白浜口駅(現JR白浜駅)に降り立った。その中には昆虫青年と彼の高校からの悪友からなる5人組が、彼等のカバンの中に収まる麻雀パイと共に含まれていた。駅から明光バスで本社前(現旅館むさし前)まで行き、そこからたくさんの荷物を持って海岸通りを実験所まで歩いた。宿舎を始め全ての建物は木造だったように記憶する。全ての障子・襖^{ふすま}が開け放たれている非常に明るい宿舎に投宿した。夜は蚊帳を吊って寝た

が、寝不足であった。蚊のせいではなく、スズメ（無論麻雀のこと）のせいである。

実習の内容は磯採集・ウニの発生・海洋観測の3つであった。発生にはコシダカウニを使用した。担当したのは関学の小島・前木両先生であった。ウニの発生を初めて見て感動しない人は少なからう。臨海実習でウニの発生を取り入れる最大の目的はここにあるように思う。かつての学究はこの過程の中に神を見たであろうし、非常に多くのことが解明されている現在でも、その神秘性を見るものを驚嘆させるに充分である。テキストとして示されたのは実習室の引き出しの中にあったウニの発生の過程を追った写真の図版であり、撮影および図版制作はかつて瀬戸でプランクトンをなさっていた山路勇先生である。この図版は今でも実習室の引き出しにある。おそらく未だに学生実習では用いられているものと思っている。海洋観測は無論、実験所の布施慎一郎先生の指導であった。

磯採集は時岡隆先生に連れられて島島へ行った。島島取得は1968年、分室建設は1971年なので、当時は建物はなかった。定かではないが、花の盛りのオオマツヨイグサが生い茂り、ユウスゲのレモンイエローの花が印象的だったように記憶する。島の南岸を半周したが、豊富な生物に腰を抜かすほど驚いた。種多様性だけではない。そのバイオマスも並はずれていた。かの海岸動物図鑑に出ていたあまたの動物を生息地でつぶさに観察が出来た。田辺湾入口に近い西端岩礁のウニのアパートと、南岸にある遠浅の砂浜のムラサキハナギンチャクとウミシャボテンの群落とは特に印象的であった。またこれまでまったく経験のなかったタイドプールの観察も魅力的であった。タイドプールではコバルトブルーのソラスズメを初めて見た。最も感激したのは生きたタカラガイ類とウミトサカで、後者は図鑑では固定標本が示されていたが、生きた実物の見事さに圧倒された。採集物を実習室に持ち帰り、学生みんなが採集

したものを整理してみると、それまでの経験からは無数という語が最適であるほど、多くの動物が目の前に並べられた。磯採集は期待を遥かに上回り、昆虫青年に一生消えない強い印象を与える結果となった。内海先生の海岸動物図鑑は珍しい動物を選んで掲載したのではなく、緒言にもあるように、白浜で普通に見られるものを集めたものであることを改めて認識した。それと共に、なぜ白浜の海はこのように異常に多様性に富むのだろうかという素朴な疑問を持ったものである。しかしまた、それは京大がここを臨海実験所に選んだ最大の原因だとも考え、自己の中で矛盾なく解決したことにしておいた。昆虫青年が知る海であった瀬戸内海はすでに半分死にかけていたにもかかわらず、この多様性の高い海は人間活動の悪影響から隔離しているように見えたのである。

併設されている水族館も見応えがあった。これまで見た水族館は須磨と鳥羽のみであったが、それらとは基本的に異なっていた。そしてここでも図鑑で見ていた種を多く発見した。

昆虫青年にとっては臨海実習は授業ではなかった。キャッチボールや麻雀と同じ趣味の時間であった。前述のように、スタッフも半ば夏休みの気分であったが、我ら5人組はもっと遊山気分であった。この5人組は夏休みに入ってすぐに、2週間にわたって中部～関東地方の山々をめぐる。昆虫とクモ類を採集し、高山植物を観察し、野鳥の写真撮影と鳴き声の録音をしながらである。

しかし昆虫青年にとって、この磯採集での収穫はあまりに大きく、以後の人生に与える影響が強かった。まず第一は、潮間帯付近の動物の多様性が異常に高いところが自身の住む地の比較的近くに存在する（つまり水平距離についても、水深の面でも）ことを発見したこと。第二は保育社の海岸動物図鑑やその他の書物から得た海産無脊椎動物についての知識は大学でも通用することを認識したことである。

翌1965年9月、白浜の番所崎へウニを捕りに行った。ウニの発生をもう一度見たかったからである。例の悪5人組で出かけ、ムラサキウニを採集後、実験所横の番所崎へ降りるところにある祠ほこらの洞窟で一晩泊まり、翌日大阪へ帰って、5人組の一人で、趣味に写真をやっていた者の、家の二階を占領して、採卵-受精を行い、顕微鏡撮影をしながら次の日まで徹夜で観察を続けた。発生は非常にうまく進み、見事なプルテウス幼生を得て、それら発生の過程を写真に収めた。また、一部プルテウスを広口ビンに入れたまま、捨てるのを忘れていたが、10日ほど後、撮影した写真を現像・焼付けすべく集まった時に、なんと、タンスの上に放置してあったビンの中で暗紫色の数匹の稚ウニに変態していたことを発見した。当時、それが珍しいこととは知らずに、そのまま捨ててしまったのが心残りである

1967年に北大の大学院へ入った。その年の夏休みに、学部学生の3年生と4年生のために行われた臨海実習に参加した。厚岸臨海実験所で行われたこの2つの実習は日程的に連続していたので、約半月間厚岸の海とつきあった。気候の違いで、真夏でも寒い日にはストーブに火が入り、磯採集に出かけるときにはヤッケに、足の付け根までのゴム長という重装備である。資源量の豊富な海で、バイオマスは確かに大きく、夏でも岩面が見えないほど海藻が繁茂しているが、多様性の面、特に色彩面では地味であり、瀬戸での臨海実習の経験しかなかった者にとっては、日本は広いと実感できる場面であった。しかし、昆虫青年は暖海を指向する傾向が強かった。

そのような指向の為か。翌1968年から1970年までの3年間、毎年春に4-5日間、瀬戸を利用してもらった。イソギンチャク類とカンザシゴカイ類の採集のためである。そのうち1度は北大の内田 亨 名誉教授と一緒にお世話になった。当時、内海先生・時岡先生の他、布施慎一郎・西村三郎・荒賀忠一の

諸先生がおられた。滞在期間が短かったせいもあり、内海先生には種々お教えを頂いたが、諸先生方の研究や生活をかいま見たり、実験所全体の動向を感じずるまでには到らなかつた。宿舎の辻のおばちゃんにはスッパイ夏みかんを沢山頂いたし、辻のおじちゃんには「これなかなかおいしい貝ですよ」といって磯で取ってこられたマガキガイを初めて賞味させてもらった。ただし、この3年間の間に、番所崎周辺の海況はかなり変動したように見受けられた。あれほど多産したハナマルユキとハナビラダカラや、比較的普通に見られたヒメイトマキボラやシラヒゲウニが年を追って少なくなり、それと共に、磯が寂しくなっていくように感じられた。マガキガイも急激に姿を消したと聞いた。乱獲なのか、環境汚染なのか。

1972年に串本に着任した。その時から非常に頻繁に瀬戸へかようようになった。目的は書庫の文献であった。全ての建物が木造であった実験所で、最初に建てられた鉄筋の建物は、1965年に建てられ、現在もそのまま残る書庫である。わが国で、海洋生物学の貴重な文献が最もそろっている瀬戸の実験所で、当時のスタッフが最も大切にしなければならぬものは何であったかを如実に示している建物である。その入口の前に臨幸記念碑があるのは単なる偶然であろうか。瀬戸へ頻繁にかようようになって、おぼろげながらその内情が見えてきた。実験所の中はスタッフと院生があふれ、非常に活気にあふれていた。前述の教官以外にも、水族館には田名瀬英朋さんが、そして、実験所敷地の最も奥まったサマーハウスには山本虎夫さんがおられた。当時院生と研究生合わせれば10人ほどもいたように思う。以前から内海先生には一方ならぬお世話になっていたし、時岡先生にも院生時代からご指導いただいた。また串本へきてからは、あまり必要ではないという理由から、多くの研究者から贈呈された別刷りをご恵贈いただいた。さらに時岡先生には1972年秋に行われた第2回

国際腔腸動物シンポジウムで、鐘浦研究所との共同主催とさせていただきます、開催・運営について多大なるご配慮を頂いた。その他の前出の5名の先生方にも、串本へきてから随分色々な面でお世話になった。外側から瀬戸を見ていると、大海原に浮いている流れ藻のように思えた。流れ藻には色々なものが付いているが、その付き方も様々で、世間から隔絶して、己の思うように漂っている。内海先生より以前の瀬戸の雰囲気は存じ上げないが、内海先生と時岡先生とのコンビネーションの包容力が、多くの若い人々を包含して、瀬戸をわが国における孤高の海洋研究のメッカに育て上げたものと思っている。

院生で来所したときもそうだったが、山本先生が昼夜を問わず、酔って闖入してきて、色々なお話をされた。お酒が好きなのではない、元来シャイな性格で、アルコールが入らないと人との会話に気後れされたのであろう。串本へ来たとき、南紀生物同好会の作業スタッフに取り込まれた。そのようなこともあって、サマーハウスには度々お邪魔させて頂いたが、そこで今福道夫君（京都）などと麻雀をやった。遊びについては、当時瀬戸には野球チームがあり、海中公園と試合をやった。いつも瀬戸が勝っていたように思う。相手チームには今福君のようにあまり上手ではない選手もいたが、キャプテンの荒賀先生を初め、柳沢康信君のように私の太ももより太い腕をした強者もいて、昆虫青年の投げる球では勝負にならなかった。

串本へ来た翌1973年から、関学の臨海実習のお手伝いをするようになった。9年ぶりに島嶼へ磯観察に行くと驚いた。生物相が大きく変化していた。特に南側の遠浅の砂底の生物群集は全く姿を消していた。昆虫少年が瀬戸内海で経験した悪夢は、紀伊半島では無関係の現象だと思っていたが、そうではなかった。

串本へ来て、水族館に関わるようになって、改めて瀬戸の水族館を見ると、学生実習で、あるいは院

生として訪れた時とは異なった面が見えてくる。瀬戸の水族館は元来、実験所として、実習や研究に必要な材料として必要な生物を畜養しておくための施設として出発した。それを一般に公開したことによって、観光客と、本来の目的であった学生と研究者の、両方の要求を満たすように充実を図らなければならなかったに違いない。そこにあった姿は、従来の水族館から発展したイメージである魚類と海棲哺乳類をメインとし、海水の匂いのしない水族館とは異なり、見る人に強く海水を意識させ、魚類だけでなく、出来るだけ多くの無脊椎動物を展示する水族館へとシフトしてきた。そこにあるのは展示生物の正確な生物名と、丁寧な説明である。

1950年代の観光ブームに乗って、非常に多くの観光客が白浜を訪れた。町のお土産屋さんに、白くさらされたイシサンゴ類の骨格が値札を付けて山積みとなり、それらが飛ぶように売れていった。そのおかげで一財産つくった人や、家を建てた人もいと聞く。無論田辺・白浜の海中からサンゴ群集が姿を消した。観光客の増加によって、瀬戸の水族館収入も思わぬほどに大きくなったのは事実である。現在の第3・第4水槽室と増築され、かつての無脊椎動物中心の展示から、魚類が幅をきかせるようになった。なぜ魚類なのか。魚類は飼育の面、展示の面、それに入手の面で、最も容易な展示対象生物に違いない。したがって、世の多くの水族館の主要展示生物が魚類になっているのである。無脊椎動物の展示には、何よりも人件費がかかりすぎるといふ決定的な欠陥がある。しかし水族館の飼育をしていると、大型の魚類を飼育してみたいという欲望がわいてくるようである。瀬戸でもついに大型水族のための水槽を新設した。現在の第1水槽室である。外から水族館一帯を眺めると、3階建ての白亜の大型建築物として人目を引くが、ご存じの通り、1階には実験所の事務室が、2階には飼育担当室があり、

3階は出来た頃は何もなく、卓球台を置いて職員の福利厚生に充てていた。実を言うとこの卓球台にも大にお世話になった。現在実習室の向かいの講義室に卓球台が置いてあるが、これが当時の卓球台なのか、代替わりしたのかは知らない。学生が実習の合間に卓球をやらせろと言ってうるさい。

串本海中公園の水族館は1971年10月にオープンし、昆虫青年は1972年4月に着任した。水族館には展示生物の種名に関する一切の説明がないばかりではなく、水槽の説明もない。海中公園の水族館ということで、海中の風景を切り取って水槽にしているの、生きものは景観要素の一部であって、それぞれが何であるかの説明は不必要である、というのが理由である。またこの水族館は目の前の海中公園を紹介するためのものであるから、串本近海に住むもの以外は展示しないというコンセプトを持っていて、これは基本的に現在も引き継がれている。この点は瀬戸と似ている点である。しかし、これもよく考えれば、前述のように、紀南地方の海が異常に高い生物多様性を示すために、他地域から種々展示物を持ち込まずとも、水族館としての体裁を保つことが出来るのが最大の原因であろう。

展示生物に無脊椎動物が多いことと、大型の海棲哺乳類等を使ったショーをやらなかったことも共通している。串本でイシサンゴ類飼育に成功したのは、イシサンゴ類の群生地が目の前にあり、その付近からくみ上げた大量の自然海水が使用可能であったことと、水槽内に直射日光を採り入れたという2点に尽きる。イシサンゴ類を始め花虫類は飼育困難な動物といわれてきたが、水質環境だけクリアできれば、少なくともイシサンゴ類だけは飼育は困難ではない。動物園でサーカスをやらなくなって久しい。水族館にも近い将来そのような時代が来るだろう。串本も昆虫青年が来たその年の内に、展示生物の説明をどうするかを検討を始めた。知りたくな

いという見学者にはともかく、知りたいと思う人にはそれを知る手段を提供する義務があるというのが青年の主張であった。さらに飼育を担当する者もその他の職員も、名前を知り、他の多くのことを知って初めて、海とそこに生活するものへの理解が進み、それらが織りなす海中景観や自然環境への造詣も生まれるのは当然のことである。

日本には多くの水族館があるが、上述の如く、この両館はその内容が他の館に比べてよく似ているといえる。ただし、最近になって経営者が代わり、内装や表示も変化し、アパレル風になったというのが、かつての水族館の良さが大いに失われた気がする。20年も経つと、欠陥に気が付いて、またもとの瀬戸風の館に変遷していくのではないかと考えている。

串本へ来た翌年の1973年に母校の臨海実習の手伝いに瀬戸へ行き、実習の一環として、島島で、あるいは番所崎で、磯観察を行っている。その間にスタッフである壺山嘉郎さん、太田満さん、山本泰司さん、山本善万さん、興田喜久男さんには実習材料の採集や、実習船の使用に関して、永年にわたって大変お世話になってきた。1960年に初めて瀬戸を訪れた時から、陸上も海岸も変わってきた。内海先生・時岡先生に続いて、原田英司先生が来られた。また伊藤立則君が北大から来た。彼が瀬戸へ来てすぐ串本を訪れた際に、原田先生から「何もしなくても良い。自分の仕事だけをやってくればよい。」と言われたと話していた。原田・伊藤・和田の3人でうまくいっているとはばかり思っていた。何があったのか話してくれなかった。単なる家庭の問題だけだったとは思えない。北大の師、山田真弓先生からは、「側にいて何をしておったのか」と叱られた。

丁度その頃から、「南紀生物」の編集を一人でなさっておられた山本先生が、編集原稿の増加と、先生のお歳のせいで、山本先生・和田君と、陸産貝類の分類をやっている湊宏さんと昆虫青年の4人で委員

会を作って編集をやることとなった。時岡先生が「山本虎楠」と呼ばれたという、虎夫先生の知識は広く、この時からお話をお聞きする時間が増えて、大いに教えられるところが多かった。しかし山本翁も寄る年波には勝てず、哀吾生之須臾、危南紀生物之無窮（cf. 蘇軾；前赤壁賦）。南紀生物同好会の将来を心配されだし、生前に整理をして冥土に旅立とうと考えられた。そこで同好会を解散し、会が集めた文献をそっくり県立図書館へ寄贈するよう動かされた。そのことを伝え聞かれた時岡先生は大いにご立腹、「これまでに大きくなった南紀生物はもう山本虎夫個人の物ではなく、会員みんなのものだ」と大喝され、「南紀生物の文献を日御碕より北へ持って行くとは何事か。それらは紀南にあって初めて本来の機能を発揮するものだ」とも諭したと聞く。南紀生物を見守り育んできた時岡先生にしてみれば当然の行動であった。南紀生物の解散はこれで決着が付いたが、すでに県立図書館へ寄贈してしまった一部文献は取り返すことが出来ずに、現在も和歌山市西高松の県立図書館に、利用者のないままに保管されている。

昆虫青年は山本先生亡き後も、未だに南紀生物の手伝いをさせていただいているが、それには2つの理由がある。一つは、海中公園は生物調査を受託するが、生物群をそれぞれに分担してもらっている。貝類を担当していた岡本一志君と、海藻類を担当している宇井晋介君は、標本を持って度々山本先生を訪ね、教えを乞うた。それで両君とも一応、これらの仲間が何とか分かるようになった。これらの同定作業は調査費をもらって受託したものである。そのことを知りながら、いやな顔一つせずに、親切にご指導いただいたご恩に対して報いなければならないと考えているからである。さらにもう一つは、南紀生物の揺籃期ようらんに随分面倒を見ていただいた内海・時岡両先生のご恩に、南紀生物は会として報い必要があるとの考えからである。

関学の臨海実習は1990年代に10年ほど中断したが、理学部が理工学部となり、その中に生命科学科が創設された2002年から臨海実習が再開し、今でも続いているが、学生の思考や価値観の違い、興味の持ち方が非常なスピードで変化しているように思える。最近奈良興福寺の国宝阿修羅像が東京と九州へ行って、ブームになっている。昆虫青年の考えではこの像や、京都太秦広隆寺の弥勒菩薩は中高生の時に見るべきものだと思っている。少年時代に見たときの感動は、成長して初めて見たときの感動とは全然別のもので、大人での感動はその人の以後の人生に大きな影響を与え得ない。一方少年時代の感動は多くの人の生き方に影響を与えるように考えている。すなわち、人には何時感動を受けるべきかと言った適齢期があるように思う。

昆虫青年が初めて瀬戸の海と出会ってから、田辺湾・番所崎をめぐる海域環境の変化は著しい。最近海況は持ち直しつつあるという。しかし、昆虫少年を驚嘆させたあの海の多様性には遠く及ばない。驚きの発見があってこそ、子供達は育っていく。最近の瀬戸を取り巻く海を更り豊かな教育の場にするためにはどうすべきなのかを考えなければならない。

55年前に昆虫少年に海を教えたあの五日市のかつて防波堤のあった場所へ10年ほど前に行ってみた。そこに立って海の方面を眺めても、地平線の彼方まで埋立地が続いているのみだった。海の西側に横たわり少年たちの格好の遊び場だった海老山かいろうやまはこんもりした松林だったが、全山削られて住宅密集地と変貌していた。そういえば巨大な黒松が林立した実験所の構内も大きな松は姿を消した。瀬戸を取り巻く海況も変化した。実験所内も変化した。社会情勢の変化には抗しきれない面もあるが、それに対抗して築き上げたものが瀬戸の歴史ではなかったか。地域の、あるいは海洋国日本の精神的な柱になることを期待して冗長な文を終えたい。